

第一次世界大戦とマックス・シェーラー

阿内正弘

序

およそあらゆる思想は、それが「思想」という名前に値する限り、それを産み出した人間の社会的・政治的・経済的状况を離れて、いわば真空状態で存在するものではない。例えばプラトンの国家論の成立が古代ギリシアのポリス社会と、トマス・アクィナスの哲学が中世の有機体的社会秩序と密接に結び付いているように、一見したところでは完全に現実から超越しているかのように思える純粹な形而上学の体系ですらも、こうした事情は決して例外ではないと言えよう。

もちろん、かと言って「哲学にとって諸々の問題およびその解決方向は生産力の発展によって、社会的発展、階級闘争の展開によって立てられる」という、『理性の破壊』におけるルカー

チの俗流マルクス主義的な歴史観は、基本的に却けられなければならないであろう。あらゆる思想を例えば経済的諸関係の単なる関数とみなすことが、最終的に自分自身の主張の立脚点を掘り崩すことになることは、ここで改めて指摘するまでもあるまい。すなわち、様々な実在的因子は、とりわけそれが動揺する時代においては、その時代の人々の意識の中にある種の危機意識を産み出すが、それに対して知識人と呼ばれる人々は代表して何らかの対応を迫られることになる。しかしながら、その際「解決の試み」およびその試みを正当化する体系は、ルカーチが主張しているように実在因子によって完全に決定されているとは必ずしも言えないように思われる。自分自身の歴史的・社会的状況に対してある程度の距離を取り得ることは、あらゆる思想家にとって最も基本的な前提条件なのであり、シェーラーやマンハイムの「自由な知識人」という理想はこうした文脈において理解され得る。したがって、反対に思想家が自らの

時代状況に対して意識的に充分な距離を取ることができない場合、彼は単なるイデオロークあるいは扇動家に墮する可能性が生じると言えよう。しかしながら、他方において真の思想家と扇動家との境界は必ずしも明確であるとは限らないこともまた事実である。本論稿の課題は、以上のような事態を念頭に置きながら、第一次世界大戦に対して哲学者マックス・シェーラーが取った態度を検討することによって、知識人の時代状況に対する関わり方の問題点を明らかにすることである。

一 ドイツ戦争の熱狂

第一次世界大戦が帝国主義の進展によって不可避免的にもたらされたものであるのか（ゴロー・マンなど）、あるいはその責任がほとんど一方的にドイツの側にあるのか（フリッツ・フィッシャーなど）という議論は、本論稿のテーマにとって重大ではない。いずれにせよ疑い得ないことは、ドイツ国民の圧倒的多数が、それも一般に「知識人」と言われている人たちの多くも含めて、第一次世界大戦の勃発を熱狂的に歓迎したことである。そして、マックス・シェーラーもまたこうした熱狂にとらわれたのであった。彼の『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（以下、『形式主義』と略記）の第一部が『現象学年報』に掲載されたのは一九一三年であり、さらにゾンバルトやトレルチによって高く評価された『ルサンチマンと道德的価値判断について』は一九一二年に、『共感の本質と諸形式』

の初版である『共感感情の現象学と理論に寄せて、および愛と憎について』は一九一三年に公刊されている。したがって、シェーラーのいわゆるカトリック期の思想はすでに第一次世界大戦以前に完成していたとみなすことができよう。しかしながら、ストードによれば、「戦前には彼は『形式主義』の第一巻によってアカデミズムの世界では少し注目されていた。さらに、戦前の一〇年間において、様々な学問的および文学的雑誌に発表されたブルジョアの退廃についての彼の新ニーチェ主義的（neo-Nietzschean）批判は、多少大きな注目を浴びていた。

……けれども、ドイツ人たちのほとんどのことによって、マックス・シェーラーは一九一五年における彼の戦争に対する賛辞を読むまでは存在しなかったのである。⁽⁴⁾こうしたことばに示されているように、シェーラーの著作の中でドイツの精神的状況にとって最も重要な意味を有していたのは、『戦争の精神とドイツ戦争』（一九一五）に代表される、いわゆる「戦争論文」と呼ばれるものであったのである。

ところで、この論文の全体的な調子は「戦場におけるわが友人たちへ」という献辞と、「けれども、戦争もまた榮譽を担うものであり、人間の運命を動かすものである」というシラーの詩がモットーとして巻頭に置かれていることからすでに明らかであるが、さらに彼は第一次世界大戦の勃発に関して序論の中では次のように述べている。「固有の国家的運命が、最も小さなものから最も大きなものに到るあらゆる個人の核心にまで到達しているということ、さらにその運命によってわれわれの

各々が何であり何に値するの……が前もって決定されまた共に決定されているということを、われわれがこの時に一般的に感じ取っていた事実——それはこの平和世代が体験したことの中で最も公然たる、最も一般的なことであったと同時に、最も隠された、最も個人的なことでもある。世界の広く大いなる歩みと、あらゆるたましいにとつて最も親密な熱情 (Bestreben) は、突然一つの筋目の中で結ばれていることがわかり、不思議なことに相互に依存して進行していることを示した。われわれは、もはやわれわれが長い間そうであったものではない。孤独ではない！ 個体——民族——国民——世界——神という連続の間の引き裂かれた生の接触は突然回復し、そうした諸力は詩、哲学、祈りおよび祭儀のすべてがそれぞれかつて感情にもたらした得たよりも大きな波をあちこちに立てているのである。⁶」ストードによれば、一九一四年の九月にシェラーは兵役を志願したけれども、すでに四〇才になっていた彼は入隊を拒絶されたという。⁷ このような事実は、シェラーの興奮が決してことばだけのものではなかったことを示すものであると言えよう。すなわち、少なくとも精神的な側面においてだけでも第一次世界大戦に協力しようというシェラーの積極的な願望を表わしているのが、「戦争の精神とドイツ戦争」であつたわけである。この著作は、「戦争の精神」と「ドイツ戦争」とに分かれるが、前者においては戦争一般の哲学が論じられ、後者においては第一次世界大戦におけるドイツの立場の正当化と将来の世界政治の予測が情熱的に行なわれている。したがって、オルテガが述

べているように、前者は学問であるが、後者は信仰でしかないとも言えよう。⁸ まず戦争の理論的側面に関して、シェラーはそこで汎神論期の彼自身の見解とは正反対の次のような前提から議論を進めている。「戦争とは——戦争の自然主義的解釈がわれわれに信じさせたがっているような——理性的精神の無力ゆえにその地位を代理している物理的暴力の単なる表出ではない。それは、われわれが国家と名付ける精神的な集合人格性の権力および意志の相互対決である。こうした権力の相互対決は、権力意志が支配に値するかどうかを確認するために物理的暴力という行為の中にのみ表出される。しかしながら、戦争が奉仕しており、常に奉仕して来た——戦争を指導する者たちの主観的意図の彼岸において——究極の客観的目標 (Telos) は、地上における最大の精神的支配権以外の何ものでもない。……戦争はその最深の核心においては精神に起因し、精神のために存在している！ 権力もおまた精神である。それは、その本性上死せる、麻痺した、物理的な暴力との区別においてそのようなのである。⁹」このような観点から見れば、戦争はいわゆる平和主義者の見解におけるように単に決して否定されるべき悪なのではなく、むしろ積極的な意味をも有していることになる。すなわち、シェラーによれば「一見したところ人間における最も徹底的で最も戦慄すべき分離や切断の力および原理であるように思われる戦争が、実際には人間を結合する最強の力を提示しており、それゆえ戦争の精神を人間におけるまさに最も力強い統一形成者と名付けることができる」とみなされるのである。

さらに、「戦争は、分割出来ない最高の諸価値へとわれわれの道徳的意識を高め、拡大し、深化し、引つ張って行く」とも言われているが、こうしたことばからシェーラーがこの論文において戦争の創造的役割を強調していたことが明らかであろう。

これに対して、平和状態は「眠っている状態および感情的・精神的に盲目の状態」¹²⁾と等置されているが、そこではシェーラーがルサンチマンの特性として見ていたように、諸価値は他者「より以上」であるかどうかという比較においてのみ与えられるのである。その際、シェーラーによれば戦争と平和との交替は一種の自然のリズムであるとみなされ、それゆえ「こうしたいわば有機的に活動的な戦争の共同原因は――どれほど矛盾するよう¹³⁾に思われようと――『平和』自体以外の何ものでもない」のである。われわれは、こうした見解の中にいわゆる「通俗化した生の哲学」の特質を見出すことができる。すなわち、一方において動的原理としての戦争の創造性が称賛され、他方において静的原理としての平和の価値が貶められることによって、シェーラーの戦争理論は現状からの脱却のみをめざす動態性に立脚する立場を代表しているのである。したがって、このような観点から見れば、彼の見解は当時のドイツにおいては全く平凡なものであったと言えよう。しかしながら、まさしくそうした平凡さゆえに、『戦争の精神とドイツ戦争』は前世紀におけるラガルドやラングベーン¹⁴⁾の著作のように広範な読者層を見出すことになったのである。

ところで、先に見たようにこの論文の後半は具体的な世界状

況の分析と展望とにあてられていたわけであるが、そこで特徴的なことはシェーラーがもっぱらイギリスを攻撃の対象としている点であろう。またやストードを引き合いに出せば、イギリス嫌いはドイツの知識人たちにおいてはすでに一九世紀の後半に普通の態度となっていたが、そうした見解を代表する者の一人は、ゾンバルトであった¹⁵⁾。このような事態は、経済的には近代化して行つた後進国ドイツの、先進国に対するルサンチマンに充たされた競争意識の現われとして理解されよう。したがって、ここでシェーラーは、ラガルドなどのドイツの非合理主義的思想において憎悪の対象となっていた近代資本主義精神の諸内容をイギリスに投影しているわけである。こうした観点から彼は、この著作の最後に「イギリスのエートスと偽善の心理学について」と題する付録を付けているが、そこではイギリスの思考において例えば文化と快適さ、思考と計算、理性と経済、善と有用なもの、世界と環境世界、共同体と利益社会などが相互に混同される傾向にあると非難している。これらの二項対立はすべて人間学における彼の精神と生命との区別に基づくものであり、さらにその際「文化」が精神的諸価値に対する従属価値を、「文明」が有用なものの価値を意味するとみなされているのであれば、ここにあるのはクラークスや「非政治的人間の考察」のトーマス・マンのそれに代表されるような全くありふれた見解であると言えよう。いずれにせよ、こうした前提からシェーラーにとつてはドイツの第一次世界大戦における正当性が導出されることになる。すなわち、西洋近代において

特徴的なルサンチマンによる価値の転倒の体现者としてのイギリスを打ち破り、新たな共同体を確立することがドイツの使命であり、この戦争の意味なのであった。これに対して、資本主義精神が実際に西洋の精神の本質であれば、「西洋において生温いイギリスの快適さと形式的な文明が独創的な人格的文化に対して勝利し、永久に勝利し続けるに違いない」¹⁷⁾けれども、シェーラーによればそのような事態はまさに西洋の没落の始まりを意味しているのである。

二 ドイツ的民主主義について

前章で見たような激越な戦争賛美は、一九一六年に出版された論文集『戦争と再建』においては早くも影をひそめる。それはまたドイツ国民一般の精神状態に対応するものでもあった。ちなみに、この年は彼がしばらく疎遠になっていたカトリック教会に本格的に復帰した年である。もちろん、ここに収録された四篇の論文もすべて協商側からの非難に対してドイツの正当性を弁護するという意図に基づいて書かれたものであるが、そこでは彼の論調はより穏やかになっている。例えば、「有力な諸国民の民主主義の精神と理念的基礎」においては、協商側の「第一次世界大戦は民主主義の權威主義的国家に対する戦争である」という主張に対して、「民主主義」という概念を社会的に考察することによって反論を試みている。それによれば、「社会学的な世界観形式としての民主主義論(Demokratismus)

あるいは貴族主義論(Aristokratismus)と——歴史的に事実的な(または可能的な)政治的諸党派の特徴付けとしての民主主義(Demokratie)あるいは貴族主義(Aristokratie)とは、まずもって完全に異なっている」¹⁸⁾。その際シェーラーは、民主主義論を「大衆、多数、『多くの者たち』が、あらゆる可能な集団形態……の形成において推進し形成する力であり、また理念や規範を指定する力でもある」という哲学的確信、それゆえ諸集団を統合する諸価値をこれら多くの者たちが決定し、これに対して『指導者』および『典型』は、多くの者たちから導出された単なる代表者や『代弁者』を表わしているに過ぎないという確信¹⁹⁾と定義している。すなわち、ここで最も重要視されているのは平等である。ところで、先の民主主義論と実際の民主主義との区別は、こうした哲学的確信が歴史的には様々な現われかたをすることになるという見解に基づくものであるが、そうした様々な現象形態の相違を把握し、それによってドイツ的な民主主義の精神を描き出すことが、この論文におけるシェーラーの意図であったわけである。

その際シェーラーは、イギリス、フランスおよびロシアの民主主義を比較のために取り上げている。彼によれば、まずもってイギリスの民主主義は一般的に貴族主義的であると性格付けられるが、そうした貴族主義的性格は、以下のような点に示されている²⁰⁾。

①イギリスの民主主義は、いつでも第一には他の階級との関係における階級の自由主義である。

②その党派的発達が複数的である。

③一方では純粋な所有や階級に基づく統一に対して経済的な職業組合が、他方では国家の政治的支配の努力に対してこの職業組合の経済的利益が優勢な支配力を有する。

④民主主義の根本原則を他の諸国家に適用することについて無関心である。

⑤民主主義の形成の歴史において教義や理論がほとんど役割を果たしていない。

これに対して、シェーラーによればフランスにおける民主主義は理論的な側面においてもまた徹底的に民主主義精神によって貫通されている。すなわち、「国家に対する……多数者の支配は、絶えずフランスの民主主義のアルファでありオメガであった」とみなされるのである。さらにフランスにおいて特徴的なのは、その「世界に対して宣教する精神」である。こうした精神は、①諸国民および諸国家は道徳的人格として平等である、②自らがどの国民に帰属するかを決定するのは、その領土の住民の多数決原理に一致した投票である、という二つの外交政策の方向付けの理念と結び付いている。しかしながら、シェーラーによれば、これらの理念は自らにのみ妥当する民主主義の精神を世界全体に押し付けようとするフランスの思い上がりを示すものである。明らかにこうした見解は、例えば『非政治的人間の考察』におけるトーマス・マンの主張と同種の問題意識に基づいていると言えよう。

このような相違にもかかわらず、シェーラーはイギリスとフ

ランスの民主主義の中に類似点を指摘する。それは、両者が共に平等の要求を所有に向けず、干渉する体系的な国家社会主義的措施に対して抵抗すること、さらに政治的自由と主観的に政治的な権利の割り当てにおける平等を他の平等すべての上に位置させているということである。これに対して、彼によればロシアの民主主義は全く異なった精神を示している。そこでは同胞概念がアルファでありオメガであつて、このような観点から見ればそれは「感情民主主義」(Gefühlsdemokratie)と呼ぶことができるのである。ここでは、愛の理念が革命的であることが特徴的である。こうした理念は、一方においてスラヴ精神一般を、他方においてギリシア的・正教的なキリスト教精神を基礎にするものであるが、前者はロシアにおける連帯感情の圧倒的優位として、後者は地上的權威に対する不信および神の下における奉仕の追求として現われているのである。こうした背景から、シェーラーによればロシアの民主主義においては「汝が私の兄弟であることを欲しないならば、私は汝の頭を打つ」という命題が支配的となり、それゆえロシアの平和主義は実際にはきわめて攻撃的なものである。ところで、ストロドはこのようなシェーラーのロシアに対する評価が、ほとんどはドストエフスキの小説から得た知識に基づいており、当時における実際のロシアの状況とは必ずしも一致しないと主張している。しかしながら、ストロドの指摘が正しいかどうかには関わりなく、われわれにとつてここで重要なのは、シェーラーがロシアに投影されたいわば母性的な連帯性に基づく社会統一を却

けているという点であろう。すなわち、ここには明らかに生命共同体と人格共同体との区別が貫かれており、それゆえこのような観点から見ればシェーラーが理想としていた社会形態は、まさしくイギリスあるいはフランスとロシアとが止揚されたものであると言えよう。それでは、彼は以上のような諸形態と区別されたドイツ的民主主義を、どのようなものとしてとらえていたのだろうか。そうした点に關して、彼は次のように述べている。「ドイツ的民主主義は、その立場を代表する諸政党の内部において、個々の卓越した精神の持ち主や理論によつて……法外に強く規定されているばかりではなく——それによつて実証される『世界觀』は、それが他の種類の財との關係において精神的文化の財に割り当てる位階秩序という点で徹底的にドイツ国民のエートスに従っている。文化財の形成に対する個体の精神的素質の平等を主張したり、あるいは文化財の形成や享受への平等の關与を直接的に……要求するようなことは、ドイツ的民主主義の本質とは完全に無縁なのである。こうした種類の諸要求に關してもまた、ドイツ的民主主義はむしろ本質的に経済的に規定されたままであるが、——それにもかかわらずそれはドイツ人全体のエートスと共に精神的文化財を経済的財よりもはるかに高く評価している。」こうした発言は、さしあたりはドイツの現状分析としてなされたものであるが、それが同時にシェーラーにとつて民主主義がそうあるべきであると思われた姿を示すものであることは明らかであろう。なぜなら、シェーラーは『形式主義』において人間が生命的領域から精神

的領域へと移行すればするほどますます個的になると主張していたからである。さらにこのような見解は、彼の生涯を通じて一貫して存在しているものであるように思われる。

しかしながら、ここでドイツ的民主主義と言われているものは、シェーラーがそれをより明確に以下のように規定しているとすれば、「民主主義」という概念が本来意味しているものからますます遠ざかることになるであろう。「個別的人格性の政治的自由の価値および国家の運命を直接的に共同形成する努力の価値を、相対的に独自の個体の精神的な自由という高い財……の背後に退かせること……は、ドイツ的精神およびエートスの最深の志向に完全に一致している。」さらに引き続いて同様の観点から、「プロイスが『官憲国家』の体系として戦っているものは、まさにそれゆえもつぱら歴史的な性質を有する個々の運命によつてドイツ民族に押し付けられたのではない。……こうした『官憲国家』は、原理的にはむしろドイツがその中で統治されることを欲している体系なのである。」²⁹⁾ここに働いているのは、「悪名高い『官憲国家』は、ドイツ民族にふさわしい、当然の、根底においてはそれが自ら欲した国家形態」という、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』における発言と同じ問題意識であろう。すなわち、こうした見解によれば、ドイツ的民主主義においては精神的自由のみがもつぱら問題なのであって、現実との関わりはもつぱら経済的平等の要求にのみ限られるとみなされるわけである。したがって、この論文においては政治的制度としての民主主義はほとんど考慮されてい

ないことが明らかであろう。ここではドイツの知識人の多くにとつて典型的な非政治性が明確に現われている。⁽³¹⁾さらに、このような「民主主義」概念の再定義が、様々な形でファシズムの思想家によつてきわめて一般的に行なわれていることは、改めて指摘するまでもあるまい。⁽³²⁾このような観点から見れば、シェーラーの民主主義論は当時のドイツの思想状況を直接的に反映するものであったとみなすことができよう。

三 ミリタリズムの諸相

さて、『戦争と再建』においても一つ重要な論文は、トーマス・マンによつても評価されている「心術ミリタリズムと目的ミリタリズムについて」(一九一六)である。この論文もまた、協商側からなされた言論攻撃に対する反論の試みであるが、ここではドイツにおけるミリタリズムをどうとらえるかということが議論の中心となっている。その際、シェーラーはまずもつて「一つの民族の(また政治的な)目的の枠組みを最初に規定するそのエートスの表現態」としての「心術ミリタリズム」と、「ある可能な民族のエートスの根本的に相違した諸形式に由来する目的領域に役立つ、あるいはその目的領域へ到達するための道具」としての「目的ミリタリズム」とを区別する。前者は、「それに従えば『高貴なもの』という生命的価値系列が『有用』という価値系列に対して上位に置かれるエートス」⁽³³⁾であると定義される。ところで彼によれば、プロイセンの軍隊はその

創設時から完全に心術ミリタリズムによつて貫かれているが、そのことはドイツが置かれている地理的・経済的状况によつて強制されたわけではない。むしろドイツのミリタリズムは、ドイツ民族の「代々の指導者層における大部分の自発的なエートスおよび根本意志の自由な表現、自然な生形式なのである」⁽³⁵⁾。それゆえ、このような観点から見れば、ドイツ人はイギリス領土に住んでいたとしてもその戦士的精神は変化しないとみなされることになる。ここで重要なことは、こうしたドイツのミリタリズムが完全に非合目的なものであり得るととらえられている点であろう。すなわち、シェーラーによればドイツの統一はドイツ人にとつて普遍的な戦士的精神が秩序や義務を重視するプロイセン的精神と結び付くことによつて初めて可能になったのであるが、同時に戦士的精神それ自体はドイツが不統一のままであつたという事態の最大の原因でもあつた。⁽³⁶⁾なぜなら、ドイツ人は外側に戦うべき敵を見い出さない場合には、内部において相互に戦い合うからである。

以上のような観点から、シェーラーはドイツのミリタリズムを世界全体の脅威であると訴える協商側のプロパガンダを論駁しようとして試みている。それによれば、協商側がドイツ人に固有な在り方のミリタリズムを承認していることは正当であるが、こうしたミリタリズムを取り除くことが世界の平和にとつて必然的な要請であるという訴えは完全な誤りなのである。なぜなら、ドイツ的な心術ミリタリズムは「最大の政治的平和愛好と両立可能である」⁽³⁷⁾ものであり、先に見たように第一次世界大戦

結語

に際してドイツに戦争目標が欠けていたことは、こうした事情に基づいているのである。すなわち、心術ミタリズムにおいて問題であるのは、自らの生命的エネルギーの高揚のみなのである。これに対して、征服衝動と密接に結び付いているのは目的ミタリズムあるいは道具的ミタリズムであるが、これはまさに商人階級、金融貴族および産業貴族などによって体现されたいわゆる資本主義精神に基づくものである。したがって、心術ミタリズムが衰退すればするほど実際の戦争は無秩序になり、戦争を継続するためには憎悪が要求されるようになり、それゆえ非戦闘員の道徳的狀態を低下させるとみなされることになる。このようなシェーラーによるドイツ弁護は、『戦争の精神とドイツ戦争』の見解と同様ドイツ人の優秀性を主張するものであることは疑い得ないであろう。しかしながら、他方においてここで彼がドイツ人のイギリスに対する激しい憎悪の原因を、ドイツの正規軍によってイギリスの領土へ進攻することが不可能であるという事態に対するルサンチマンに求めているとすれば、戦争勃発当時の彼の熱狂的な興奮が若干沈静化していることもまた明らかであろう。いずれにせよ、それに先立つ長期の平和の期間において蓄積された過剰な憎悪を解放し、消滅させるという第一次世界大戦の積極的な意義を認めようとしている点において、シェーラーはこの時点においてもなおヨーロッパの将来の経過に関して樂觀的な希望を抱いていたと言えよう。

前章まで見て来たことから、シェーラーが第一次世界大戦においてドイツの立場を弁護するために行なった発言の基本的な特質が明らかになったように思われる。それは以下のように要約できよう。

①イギリスに代表される文明から区別されたドイツ文化の独自性、優秀性の主張と、それに対応する「民主主義」という概念の再定義。「ドイツ戦争」、「ドイツ的民主主義」という表現はまさに象徴的である。

②第一次世界大戦における相互的憎悪の原因が、イギリスを代表者とする資本主義精神の興隆とそれに基づくヨーロッパ諸国民の道徳水準の低下に求められる。

③なおそうしたヨーロッパの退廃を一掃するものとして第一次世界大戦をとらえるという点に現われている、戦争の救済的な側面の強調。

しかしながら、このような見解全体を、シェーラーの思想体系全体の中に矛盾なく組み入れることが果たして可能なのだろうか。言い換えれば、そこで彼は哲学者として発言しているのだろうか、それともいわゆる扇動家として発言しているのだろうか。この問題に対する解答は、すでに戦争中の一九一七年における講演「キリスト教の愛理念と現在の世界」の中で彼が第一次世界大戦を「悟性、技術、産業、ことばというあらゆる手段を駆使して推進された、世界史において例のない蛮行」と定

義していたとすれば、疑問の余地なく明らかであるように思われる。すなわち、シェーラーがドイツ国民一般と同様に第一次世界大戦開始時の熱狂から醒め、戦争に対する評価を逆転させているというこの講演に示された事実は、彼が『戦争の精神とドイツ戦争』などのいわゆる「戦争論文」を思想家の立場からではなく完全に扇動家の立場から執筆していたことを明確に示すものであると言えよう。さらにシェーラーの議論の文脈を離れて考えても、精神的文化を専ら体现しているドイツが第一次世界大戦において精神的な権力を通じてヨーロッパ全体を退廃から救済する使命を有している、などという見解はあまりに非現実的である。その根底にあるものはドイツ思想史において全くありふれた生命力の神格化であり、したがってこの点に関してはルカーチが帝国主義的攻撃を基礎付ける生の哲学の代表的文献として『戦争の精神とドイツ戦争』を挙げていることは正当であると言えよう。

それにもかかわらず、われわれは本論稿で今まで見て来た論文を全く無価値なものとしてただ単に無視してしまうことはできないように思われる。なぜなら、戦争がそれ自体として積極的な意義を有しているのか、さらにドイツのみが果たして近代市民社会の退廃を免れているのかどうかという問題を別にすれば、シェーラーがこれらの論文において述べている近代利益社会批判は、基本的には彼の生涯を通じて一貫しているからである。すなわち、それを克服して行く方向はカトリック期と汎神論期とで必ずしも完全に同じであるとは言えないにしても、少

なくとも快適さ、計算、資本主義経済、大衆民主主義、有用性などによって象徴される利益社会は彼にとって決して本来的な状態としては認めることができないものだったことは明らかである。したがって、文化と文明との二項対立は、後にはもはやドイツとイギリスとの対立と必ずしも等置されなくなったけれども、依然として彼の理論の中に存続したままであり、その重要性を失うことはなかったのである。

さらに、「有力な諸国民の民主主義の精神と理念的基礎」において提示されたいわゆるドイツ的民主主義は、それがシェーラーにとつての民主主義の理想的な姿を示すものである限り、とりわけフランスによって代表されるとみなされた「下からの民主主義」を拒否し、民主主義とエリートとを調和させようとする彼の最晩年の理論と基本的には相容れないものではないように思われる。マックス・ヴェーバーなどと同様、「理性の共和主義者」シェーラーはその生涯において一度として大衆民主主義を肯定したことはなかった。むしろ彼がワイマール時代の右翼思想家たちと区別される点は、後者によってしばしば誤って理想化されたロシア的母性社会を先に見たように彼が却けているという事実⁽⁴³⁾に求められよう。したがって、シェーラーの第一次世界大戦に対する態度は純粋な哲学者の範囲を完全に逸脱したものとみなすことができるにしても、その背景にある問題意識自体は一貫したものであり、このような観点から見れば本論稿で取り上げた「戦争論文」は彼の哲学的意識に最初から与えられていた問題に対する誤った解答の試みとしてとらえるこ

とかでできるように思われる。

註

- (1) G. Lukács, *Die Zerstörung der Vernunft*, Berlin 1955, S. 5.
- (2) この問題に関しては、例えば村瀬興雄『ナチス統治下の民衆生活』（東京大学出版会 一九八三）とりわけその第一論文を参照。
- (3) そうした例については、拙論「トーマス・マンとワイマール共和国」『倫理学7』（筑波大学倫理学研究会 一九八九）を参照。
- (4) J. Staude, Max Scheler, 1874-1928, *An Intellectual Portrait*, New York 1967, p. 66.
- (5) マシナの花嫁からの引用。
- (6) *Der Genius der Krieger und der Deutsche Krieg*, in: *Politisch-pädagogische Schriften. Ges. Werke. Bd. 4.1 Aufl.* (Bern: Francke Verlag, 1982), S. 11. (以下「Genius」の略記。)
- (7) Staude, op. cit. p. 68.
- (8) オルテガ「戦争の精神とドイツ人の戦争」(『現代文明の砂漠につ』西澤龍生訳 新泉社) 一五一ページ参照。
- (9) *Genius*, S. 14-15.
- (10) *Genius*, S. 68.
- (11) *Genius*, S. 69.
- (12) ebd.
- (13) *Genius*, S. 71.
- (14) ラカルドとラングベーンに関しては、次の文献を参照。
F. Stern, *The Politics of Cultural Despair*, California 1961.
(邦訳『文化的絶望の政治 ゲルマン的イデオロギーの台頭に関する研究』中道寿一訳 三嶺書房)
P. Viereck, *Metapolitics. From the Romantics to Hitler*, New York 1941.
多田真鋤『近代ドイツ政治思想史研究』（慶応通信 一九八八）
- (15) Staude, op. cit. p. 72.
- (16) *Genius*, S. 218 ff.
- (17) *Genius*, S. 190.
- (18) *Der Geist und die ideellen Grundlage der Demokratien der großen Nationen*, in: *Schriften zur Soziologie und Weltanschauungslehre. Ges. Werke. Bd. 6. 3 Aufl.* (Bonn: Bouvier Verlag, 1986), S. 158. (以下「Demokratien」の略記。)
- (19) *Demokratien*, S. 158-159.
- (20) *Demokratien*, S. 161.
- (21) ebd.
- (22) *Demokratien*, S. 162-163.
- (23) *Demokratien*, S. 165.
- (24) *Demokratien*, S. 167.

- (25) Staude, op. cit. pp. 75 ff.
- (26) この問題に関しては、拙論「シェラーの人格概念」『倫理学4』（筑波大学倫理学原論研究会 一九八六）および「近代社会とルサンチマン」『哲学思想論叢』第六号（筑波大学哲学・思想学会 一九八八）を参照。
- (27) Demokratien, S. 173.
- (28) Demokratien, S. 183.
- (29) Demokratien, S. 184.
- (30) Th. Mann, Betrachtungen eines Unpolitischen, (Fischer Taschenbuch, 1988), S. 22.
- (31) ドイツ知識人の非政治性については多くのことが言われているが、例えば次の文献を参照。
- 八田恭昌『ヒトラーを生んだ国』（新潮社 一九八六）
- 脇圭平『知識人と政治』（岩波書店 一九七三）
- (32) 例えばワイマール時代におけるカール・シュミットの試みなどがその代表として挙げられよう。
- (33) Über Gesinnungs- und Zweckmilitarismus. Eine Studie zur Psychologie des Militarismus, in: Schriften zur Soziologie und Weltanschauungslehre. Ges. Werke. Bd. 6, S. 187. 以下『Militarismus』を略記。
- (34) Militarismus, S. 193.
- (35) Militarismus, S. 189.
- (36) Militarismus, S. 190.
- (37) Militarismus, S. 192.
- (38) Militarismus, S. 200.
- (39) Die christliche Liebesidee und die gegenwärtige Welt. Ein Vortrag, in: Vom Ewigen im Menschen. Ges. Werke. Bd. 5, S. 359.
- (40) Lukács, op. cit. S. 365.
- (41) この問題に関しては、拙論「近代社会とルサンチマン」を参照。
- (42) この点については、拙論「シェラーの知識社会学」『倫理学5』（筑波大学倫理学研究会 一九八七）を参照。さらに N. J. Schürgers, Politische Philosophie in der Weimarer Republik. Stuttgart 1989, を参照。
- (43) 「第三帝国」ということばの生みの親として知られるメラ・ヴァン・デン・ブルックは熱狂的なドストエフスキの心酔者であり、彼の著作集をドイツ語に翻訳した。それ以来いわゆる保守革命運動にとって、ドストエフスキは重要な人物になった。さらにこの点に関しては、スターンの前掲書を参照。
- (44) したがって、カール・アルフェウスのようにシェラーをナチズムの先駆者とみなすことはできないと言えよう。
- Vgl. Karl Alpheus, Kant und Scheler, Bonn 1981.

（あうち・まさひろ 日本学術振興会特別研究員）
 「付記」本論稿は、平成元年度文部省科学研究費補助金・奨励研究Aによる研究成果の一部である。